九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

セリーヌの 〈見出された〉 原稿をめぐって

木下, 樹親
九州大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/6632451

出版情報：Stella. 41, pp.363-368, 2022-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l’Université du Kyushu
バージョン：
権利関係：

セリーヌの〈見出された〉原稿をめぐって

木　下　樹　親

「つまりセリーヌは，書簡や小説のなかで〈解放〉時に盗まれた原稿に言及する際，嘘をついていなければ作り話をしてもいなかったわけだ」――40年以上にわたってセリーヌ関連情報を毎月提供する『ビュルタン・セリニアン』の編集者マルク・ロードゥルーは2021年9月号のコラムをこう切り出している[1)]。セリーヌを読み，それなりに知識を有する者はおそらくこの意見に首肯するはずだ。同年8月6日の『ル・モンド』紙の記事「ルイ＝フェルディナン・セリーヌの見出されたお宝」を嚆矢として，紛失したと思われていた大量の自筆原稿の出現が報じられたのである[2)]。これはフランス文学史上，類を見ないほどの驚愕をもたらす出来事であった。

事の顛末を纏めておこう。レジスタンスによる脅迫などで身の危険を感じ始めていた反ユダヤ主義者セリーヌは，1944年6月17日，妻と愛猫を連れてパリを離れ，ドイツへと旅立った。このとき彼はモンマルトルのアパルトマンに件の原稿を置きざりにせざるをえなかった。そして本来の目的地デンマークへと北上したものの，逮捕，収監され，釈放後も51年まで当地に留まることを余儀なくされた。この間にアパルトマンが接収され，原稿をはじめとする諸財産が行方不明となったのである。本国を離れ，書簡等による間接的な情報しか得られなかったセリーヌはレジスタンによって盗まれたと信じていた。

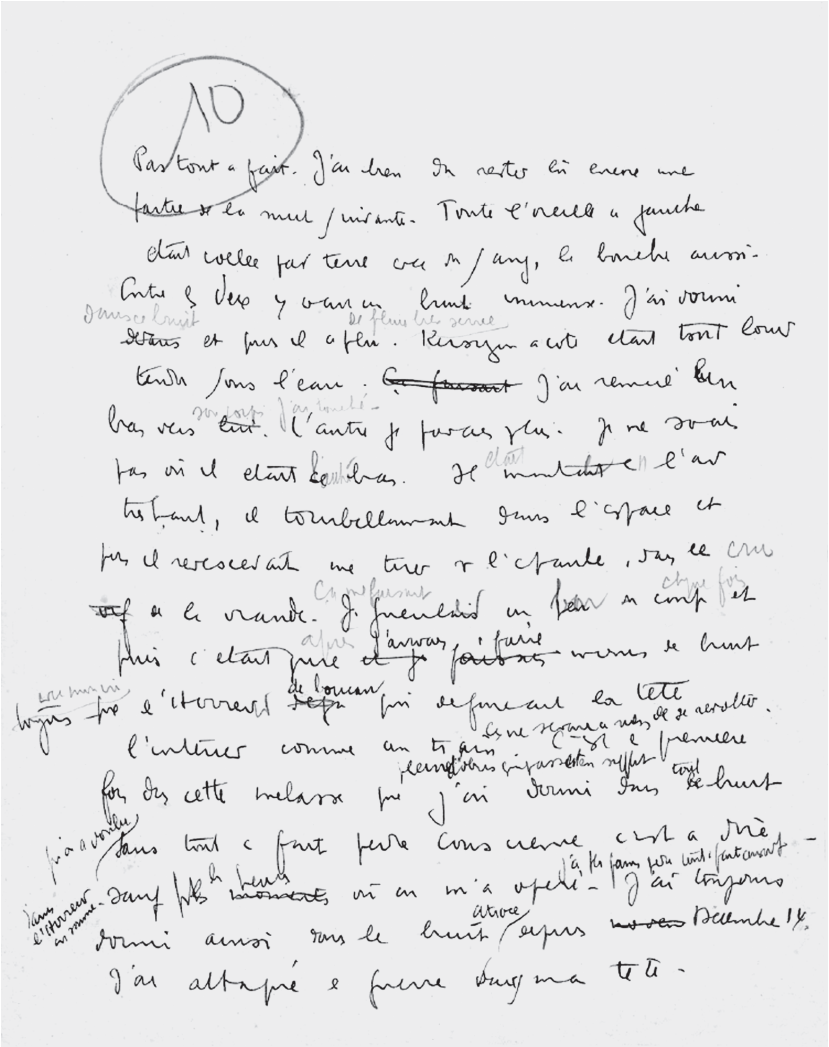
最終的に原稿を所持していたのは，『リベラシオン』紙の元記者で演劇批評に携わっていたジャン＝ピエール・チボーダ（筆名）なる人物だ[3)]。彼はある理由でこの「お宝」の公表を控えていたのだが，セリーヌの著作権を所有するリュセット・デトゥーシュ未亡人の他界（2019年11月8日，享年107）を契機に行動を開始した。著作権問題に詳しい弁護士ミシェル・ピエラにコンタクトをとり，リュセットの後を継いでセリーヌの著作権所有者となったふたり，すなわち彼女の顧問弁護士フランソワ・ジボーとリュセットのダンスの弟子ヴェロニック・ロベール＝ショヴァンと会見し，所有物のリストを提示した。2020年

6月20日のことである。このときチボーダは，著作権所有者に原稿の解読作業を行ったことを告げるとともに，原稿を散逸させずに，フランス国立図書館や現代出版資料研究所（IMEC）のような機関に納めて，研究者がアクセスできるようにしてほしいと述べた。したがってチボーダはジボーらに原稿を返還する意思があったはずだ。一方，ジボーはチボーダにその解読ノートをガリマール書店社長アントワーヌ・ガリマールに託すことや序文を執筆することさえ提案したという。両者には協力的な姿勢が見られたようだが，チボーダは何故か原稿をすぐ渡さなかった。そして数カ月の沈黙の結果，ジボー側はチボーダを盗品隠匿の廉で，ピエラ弁護士をその共謀の廉で告訴した（後に却下）。ジボーによると，チボーダがこの「お宝」を彼に委ねた人物を明示しなかったため取った措置だという。これを受け2021年3月18日，チボーダは全ての「お宝」を持参して警察に出頭することになる。かくして原稿は著作権所有者の手元に渡り，ジボーはそのいくつかの刊行に向けて，まさに90歳の老骨に鞭打つこととなった。そして夏を迎え，先述の報道が始まったというわけだ。

チボーダによると，彼が保管していた物品は27品目もあった。些末な写真や書簡などを除き，主たる原稿に限って内容を略述すると[4] ——

① ルネ王の伝説の修正入りタイプ稿
②『クロゴルド王の意志』の不完全な原稿（2023年刊行予定）
③ 2022年5月に『戦争（*Guerre*）』の題で出版された原稿（240枚）
④ 同年10月に出版された『ロンドン』という題の3部構成の小説（1161枚）
⑤『戦争（*Casse-pipe*）』の未発表章（472枚）
⑥ 戯曲『ペリクレス』の修正入りタイプ稿（後に『進歩』の題で出版される）
⑦ 1936年出版の『なしくずしの死』の不完全ながらも自筆稿バージョン（1600枚）
⑧『ギニョルズ・バンドⅠ』の不完全バージョン（600枚）

セリーヌ研究者にとって，これがいかに魅力的な資料体であるかは贅言を要すまい。①は②の先駆稿で，②は小説『なしくずしの死』のなかに挿入された中世譚だが，セリーヌの作である。彼の創作的想像力の源泉としても興味深い物語であるがゆえに，小説への挿入分断片以外の発見は大変喜ばしい。③は出版後2カ月で15万部を売り上げベストセラーとなった。デビュー作『夜の果てへの旅』で語られなかった主人公の戦場での負傷から病院での生活を題材として



『戦争（*Guerre*）』自筆稿（第１葉）

いる。看護師の物議を醸しかねない性的描写をはじめとして，作家の伝記的事実の検討に資するだろう。またその続編の④ともども，小説『ギニョルズ・バンドⅠ・Ⅱ』の登場人物と同名の別キャラクターが登用されたり，人物名に揺らぎがあったりしており，作品間関連の考察や物語の生成過程研究に大いに与するはずだ。⑦⑧も同等の資料となるにちがいない。最後に⑤はプレイアッド版収録の校訂テクストでさえ未完であるうえに，きわめて短い部分しか確認されていないため，これほど大部の草稿が残されていたことは僥倖と言うしかない。つまるところ，今回見出された資料体はこれまでの研究成果に大きな追加修正を迫りうる一級品なのである。

ところで，本稿執筆時までに公刊されたテクストのひとつ『戦争（*Guerre*）』については，ほぼ時を同じくして自筆原稿のファクシミリ版が限定出版されたため，両者の比較が容易にできる[5)]。それによるならば，前者（ガリマール版と呼ぶ）のテクスト生成にはいささか疑問を呈さざるを得ない。自ら原稿を解読したチボーダの見解と，両版をすでに対照・検討したイタリア人研究チームの成果を念頭に置いて，簡単に私見を述べたい[6)]。まずタイトルだ。見出された原稿のなかから『戦争（*Guerre*）』に次いで出版された『ロンドン』の場合，セリーヌ自身がその言葉を記したことが分かっているのだが[7)]，前者の場合，そうした書き込みは一切ない。ガリマール版制作サイドのジボーが立脚するのは，セリーヌの最も引用される頻度が高い書簡のひとつ（1934 年 7 月 16 日付，ロベール・ドノエル宛）に見られる「幼少期，戦争，ロンドン」という記述である。『なしくずしの死』執筆中のセリーヌが当時の計画を示したもので，この第２長編小説が幼少期を題材とすることから，それに続く各題材を別小説に割り振る着想を得た，つまり 3 部作を構想していたのか，あるいは『なしくずしの死』という大きな表題の下，3 つの時期を描こうとしていたのか，解釈が分かれるところだが，いずれにせよ，上記書簡の記述はタイトル案ではない。それでも，当該の表題を良しとする明確な根拠をジボーは提示できるのだろうか。また彼は『戦争（*Guerre*）』が「始まりと終わりのある，正式なる小説だ」と述べるが，この発言にも疑問が残る[8)]。これはガリマール版の直接的責任者パスカル・フーシェの説明と矛盾する。実は，本原稿の最初の頁には左上に丸で囲まれた 10 という数字が記されている。つまり，最初の頁が実は「始まり」でなく，その前に 9 つのシークエンスがあったことを窺わせているのである。

じじつ，冒頭の言葉 «Pas tout à fait» はおそらく前頁から続くものなのだが，フーシェはこれを「転写から意図的に省いた」という[9]。明確な「始まり」が不確かなものをなぜ「正式なる小説」と呼びうるのだろうか。さらに，地名の揺らぎなども考慮すると，先のイタリア人研究チームの主張のように，この原稿は独立した作品ではなく，『夜の果てへの旅』の草稿の一部だった可能性もあるのではないか。であれば，執筆時期の特定もやり直さなければなるまい。

とまれ，最も長く原稿を手中にしていたチボーダは独力で解読作業を試みており，そのなかにはフーシェのとは異なる解釈箇所もあるようだ。ガリマール版制作サイドとチボーダが協力関係を築けていれば，より有益な制作ができたかもしれない。しかしながら，ジボーはこの左翼系記者との共同作業をしたがらなかった[10]。チボーダは彼に「お宝」を託した人物たちとの約束――リュセット未亡人がセリーヌにとって都合の悪い資料を葬らないように，またこの「お宝」で金銭を得る者がいないように――を遵守し，彼女の逝去前の公表を己に禁じた。それは政治的・思想的信条に忠実な沈黙だったのかもしれないが，セリーヌの作品がパブリック・ドメインになる 2031 年を間近にひかえて，高齢の己に可能なことは全て成し遂げておきたいジボーにとって，草稿とひとりの人間の命を天秤にかけるような行為をする者とは相容れなかったのだろう。

当初，出所を詳らかにしなかったチボーダは 1 年を経た 2022 年夏，セリーヌの「お宝」がド・ゴール派で後に雇用問題担当国務長官を務めるイヴォン・モランダの家族によって保管されていたことを明かした。モランダは 1944 年から 46 年にかけて，モンマルトルのセリーヌの接収アパルトマンに住んだのだが，原稿類も回収していたのである。そしてセリーヌ帰国の際，預かっている家具類を返却する旨の書簡を彼に送ったそうだ。ただし，作家が請求書を支払うかぎりにおいて。これに対し，セリーヌが無視を決め込んだのは言うまでもない[11]。もしこのとき，両者が見解の相違を留保して邂逅していれば，そして保管原稿のことが話題に上がっていれば，70 年もの時の経過を必要としなかっただろうし，作家の晩年の執筆活動も全く異なったものになっていたであろう。だが今となっては，セリーヌ研究の修正のために，今回の「お宝」が広く公開されることを願いたい。

註

1）Marc LAUDELOUT, « Manuscrits retrouvé », *Le Bulletin Célinien*, n° 443, septembre 2021, p. 3.

2）Jérôme DUPUIS, « Les Trésors retrouvés de Louis-Ferdinand Céline », *Le Monde*, 6 août 2021, pp. 13-15.

3）以下の経緯は，チボーダがそのブログで公表した次のエッセイを参考にした—— Jean-Pierre THIBAUDAT, « Céline, le trésor retrouvé - Une déflagration mondiale (3/9) », 8 août 2022. URL : https://blogs.mediapart.fr/jean-pierre-thibaudat/blog/030822/celine-le-tresor-retrouve-une-deflagration-mondiale-39.

4）以下のリストは、次の資料を参考にした—— Marc LAUDELOUT, « Inventaire », *Le Bulletin Célinien*, n° 443, *op. cit.*, p. 13-15 ; Jean-Pierre THIBAUDAT, « Céline, le trésor retrouvé - L'inventaire (2/9) », 7 août 2022. なお③と⑤はともに戦争を意味する語なので，邦題に原題を併記して区別した。

5）Louis-Ferdinand CÉLINE, *Guerre*, édition établie par Pascal FOUCHÉ, avant-propos de François GIBAULT, Paris : Gallimard, 2022. Louis-Ferdinand CÉLINE, *Guerre, manuscrit*, Paris : Éd. des Saints Pères, 2022.

6）Jean-Pierre THIBAUDAT, « Céline Le trésor retrouvé - Pas tout à fait "Guerre" » (6/9), 11 août 2022. Giulia MELA et Pierluigi PELLINI, « Genèse d'un best-seller. Quelques hypothèses sur un prétendu "roman inédit" de Louis-Ferdinand Céline », 22 juillet 2022. URL : http://www.item.ens.fr/guerre.

7）« Note sur l'édition », in Louis-Ferdinand CÉLINE, *Londres*, édition établie et présentée par Régis TETTAMANZI, Paris : Gallimard, 2022, p. 26.

8）Propos recueillis par Laurent VALDIGUIÉ, « Inédits de Céline : l'imposture Gallimard », *Marianne*, n° 1330, 8-14 septembre 2022, p. 72.

9）Pascal FOUCHÉ, « Note sur l'édition », in CÉLINE, *Guerre*, *op. cit.*, p. 19.

10）Voir « Des manuscrits de Céline aux librairies, un travail d'orfèvre », *Dépêche de l'Agence France Presse*, 4 mai 2022. 実際,『戦争（*Guerre*）』の序文にも編者註にもチボーダの名前は現れない。

11）Louis-Ferdinand CÉLINE, lettre à Jean-Louis Tixier Vignancour, du 30 novembre 1953, in *Lettres*, édition établie par Henri GODARD et Jean-Paul LOUIS, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 1480.